

家相図と建築

—飯田・下伊那地域の家相図を事例として—

金澤雄記*

1. はじめに

家相図とは、家の間取りや方位等から吉凶を判断するために描かれた家屋全体の平面図（配置図）のことである。18世紀後半から家相診断が行われ、19世紀頃から家相図が作成されるようになり、江戸時代末期から明治時代に多く作成された¹。

家相図には、主にイロリ・カマド・コタツ等の火元や、流し・風呂・便所・水場・水路・車屋（水車小屋）等の水回りを対象に、赤字で吉・凶などの書き込みが見られ、中には赤線で改築指示を記したものもある。

建築学的な観点から家相図を見ると、現存する建物、特に主屋であれば、特にほぼ全ての家で勝手等は改築されているため、イロリ・カマド・流しの存在した位置を確認することができる²。また現在では床が張られ居室化された土間・馬屋等の旧状を知ることができる。さらに失われた建物であれば、古写真などと合わせて概要が分かる絵図史料である。加えて主屋以外にも蚕室・長屋・土蔵・門塀等の付属屋や、敷地内の水路・石垣・樹木等の構築物も描かれており、敷地全体の配置の全容を知ることができる。

筆者は長野県南部の飯田・下伊那地域をフィールドとして「本棟造³」と呼ばれる民家や、明治期に繁栄した養蚕業を営むための養蚕建築⁴等を含め、約300件の民家調査を行っており、聞取・

実測・史料調査の際や情報提供により、33件から計52枚の家相図を確認した（表1）。

これまで全国的に把握されている家相図は約300点⁵であったが、新たに一地域から初めてこれだけまとまった家相図を発見したため、情報提供も兼ねて調査報告を行う。本稿では特に家相図に描かれた主屋が現存する5事例を取り上げ、家相図の需要や実際の建築に対する影響、また家相図から読み取れる建築学的な知見を具体的に実証することを目的とする。

2. 先行研究

家相・家相図に関しては、宮内貴久氏⁶、村田あが氏⁷の研究等に詳しい。また飯田・下伊那の家相図に関しては、川後のぞみ氏に情報提供し考察いただいた⁸。

3. 飯田・下伊那の家相図

表1より、これまでに確認した当地域の52枚の家相図のうち30枚は江戸後期から大正期にかけて松浦弥太郎・琴楽・琴生・琴明・琴勝といった松浦一派によって描かれたものであり、さらにいえば、うち約半数の25枚は松浦琴生の作である。その他、作者の記載があるものが計9枚、作者不明のものが計13枚である。

江戸後期以降の主な家相流派は、神谷古歴⁹派、松浦東鷄¹⁰派、松浦琴鶴¹¹派の3派が挙げられる¹²。当地域の多くの家相図を作成した松浦琴生は経歴

* 飯田市歴史研究所研究員（建築史）

や人物像など明確でないが、大坂で活躍した松浦琴鶴を師としたようである。松浦琴生は飯田市に隣接する喬木村加々須に在住し¹³、明治22（1889）年に『萬病根切窮理』¹⁴を著している。その中で方位と人体を対応させ、建物のとある部分に不備がある（不吉である）と、それに対応する体の部分が不健康であると説いている（図1）。

松浦一派による家相図の特徴は、まず建物の作図は、柱を黒丸で示し、土壁部分は太い一重線、建具部分は細い二重線で描かれている。イロリ・かまど・流し・板の間・階段の表現はあるが、畳敷の表現はない。中央に方位盤と回転可能な人体像が付いているのが特徴であり、家相の診断結果を説明するのに用いたのであろう。中には朱書きで改築指示を記したものもあり、また上から別紙で貼り付けたものもある。さらには、方位と人体を対応させているので、体の部分や臓器の名前と、その吉凶を記したものもある（図3）。

なお川后氏により、明治20年を境に松浦琴生の作風が変化すること、作風により琴楽は琴生・琴明・琴勝とは流派が異なる可能性が指摘される。



図1 「地宅人躰符号之図」
出典：『萬病根切窮理』

中央に人体が描かれ、五行の方位と、対応して人体の部位と臓器が記されている



図2 松浦琴生の墓
喬木村加々須

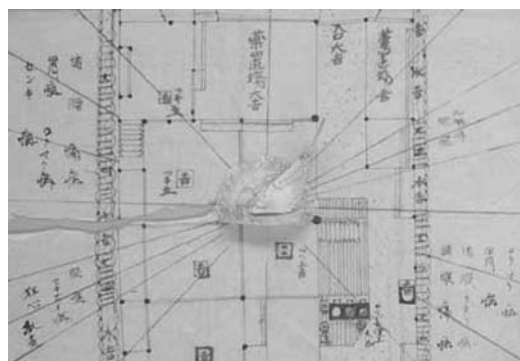


図2 西澤真太郎家（松尾）家相図（部分）

図中には、「眼病・胃病・腰痛・セキズイ病」など記されており、松浦琴生が『萬病根切窮理』で示す方位と人体の関係性を具象化した家相図である

4. 事例研究

以上のような家相図や、現存する主屋の調査を根拠として、大きな改築がみられた5事例を以下に考察する。

a. 森本信正家（松尾）

- ・飯田市域最古かつ最大の本棟造
- ・上座敷増改築

森本家は旧松尾村新井の天竜川そばに位置し、嶋田村新井分の庄屋役を務め、酒造業も行った旧家である。明治期には長野県会議員や松尾村村長を務めた森本勝太郎や、松尾村産業組合長を務め活発な政治活動を行った森本州平といった当主が現れた。森本家には8000点を超える古文書が残されており、平成14～18年にかけて飯田市歴史研究所により森本家文書の史料調査・整理が行われ、目録と史料解説を掲載した報告書¹⁵が出版された。

森本家には「文化文政時代居宅囲通繪図」¹⁶（図4）と表書きされた家相図があり、作者不明であるが森本家の主屋や敷地を描いた絵図としては最古のものである。さらに江戸後期から明治期の主屋を描いたと思われる主屋の指図¹⁷（図7）が1枚あり、以上の絵図史料と、昭和46（1971）年

に行われた民家緊急調査、ならびに現状と比較し、森本家文書の史料と照らし合わせながら家屋の変遷を追いたい。

敷地の変遷

文化文政時代の家相図には、広大な敷地と現存しない建物が描かれている。この中で現存するものは、正徳5（1715）年新始めの主屋¹⁸と、寛政4（1792）年新始めの長屋門¹⁹である。その他敷地内には酒造業を営んだ12間×5間の酒蔵と、土蔵が3棟、隠居と別家の建物などが建ち、周囲には水路が巡らされていたことがわかる。

その他、現存する三階建ての文庫蔵は明治3（1870）年の建築²⁰であり、穀蔵は規模や形状が等しいことから、文化文政時代の家相図に描かれているものを曳家したとも考えられる。主屋裏側の離れ座敷は、寛延4（1751）年に大工北方半介によって建築された²¹が、明治37（1904）年に建て替えられている²²。また養蚕業が盛んだった明治29（1896）年に8間×2間半の蚕室が建築され²³、昭和17（1942）年に主屋と長屋門の間に移築された²⁴が、平成6年に取り壊された（図8）。

主屋の変遷

森本家の本棟造主屋は、建築年代が明らかなものでは飯田市域で現存最古であり、また一階平面が11間半×9間と最大規模の遺構である。最近まで飲食店として利用されていたため、従来の土間部分は厨房その他として改築されているが、床上の間取りはそのままである。

文化文政時代の家相図は、主屋建築から約100年経過した後の姿を描いたものであるが、概ね建築当初の姿を表していると考えられる。初期の本棟造の平面上の大きな特徴として、中央に広く部屋を取って「イロリ」の間とし、屋根まで吹き抜けになっていること、それによって二階は後の本棟造のように一列でつながっておらず、前後に使用部屋として独立して屋根裏部屋が設けられていることが挙げられる。現状では「イロリ」は失われているが、吹き抜けは残存している。

また「イロリ」の位置も2度移動している。建築当初は「台所」と呼ぶ中央の広い部屋にイロリが設けてあり、明治期には土間に突出した板の間にイロリが移され、昭和期には土間の突き当たりで勝手に設けられた。

さらに森本家の大きな改築として、上座敷部分の増改築が挙げられる。建築当初では、大戸脇に式台玄関があり、そこから10畳間が二間続きになって客間を形成していた。その後時期が定かでないが、式台玄関から上座敷まで改築され、上座敷部分が大きく庭側に突出した。上座敷部分の規模や間取りが増改築前後で変わらないことから、曳家もしくは部材転用したのではないかと考えられる。現状で「下台所」と「次の間」の接続部分の柱筋が約1尺ずれており、屋根裏部分も含めて構造が複雑になっているのは、この増改築のためである。本来、本棟造において座敷までの動線としては、常客は土間から「しもで」まで通し、僧侶などの珍客は「しもで」を通過して座敷まで通すのが一般的であるが、この改築で式台から座敷への動線が希薄になり、上座敷部分が主屋から平面的に独立した。それゆえ、式台は形式的なものとなり、座敷へのアプローチは土間や式台からではなく、庭門を入り、庭から直接座敷へ入ることになった（図9）。

以上、現状の本棟造の主屋は、飯田・下伊那地域における18世紀初期の本棟造を知る上で貴重な事例であり、家相図により建築当初に近い状態を考察した。

b. 北原斌夫家（座光寺）

- ・飯田市域最古の本棟造
- ・上座敷増改築

北原家は天竜川河岸段丘の中段に位置し、代々旧座光寺村の庄屋役を務めた旧家である。下伊那国学の中心人物である15代北原稲雄（信質）²⁵や、上郷村長・衆議院議員等を務めた北原阿智之助²⁶を輩出した。

北原家には明治28（1885）年に佐々木重三郎²⁷によって描かれた家相図（図10）と、昭和46（1971）年に行われた民家緊急調査、ならびに弘治元（1555）年から明治34（1901）年までの日記を基にして代々の当主が書き写した『当家人代記』が全7巻ある。これらの史料と現状と比較し、本棟造主屋の建築初期の姿を考察する。

主屋の変遷

北原家の本棟造主屋の建築年代は正徳6（1716）年と伝えられており²⁸、正徳5（1715）年新始めの森本家とともに、飯田市域では現存最古の本棟造である。主屋の特徴、残存状況、増改築内容とも森本家とよく似ている。

明治28年の家相図では、イロリは中央の部屋（広間）にあり、勝手は設けられていない。昭和46年の民家緊急調査では土間に突出して勝手が設けられ、勝手にイロリが移動している。森本家と同様に二階は分離しており、中央の部屋の吹き抜けも残存している（図12）。

上座敷部分は明治27年に16代信綱（信允）²⁹が衆議院議員に当選した際に増築したが、当時は贅沢禁止令のため建築が難しく1日で建築したと伝わっている³⁰。それ以前に奥座敷が突出して増築されていたかは不明であるが、少なくとも建築当初には突出した奥座敷部分はないはずである。そうすると突出した奥座敷部分がない状態で、床の間のある座敷（現玄関）に直接式台が取り付くのは不自然であり、もし取り付くのであればその他の事例をみても大戸脇の下座敷（しもで）に取り付くのが一般的である。式台の風食も少ないことから、式台は上座敷部分が増築された際に一緒に付設されたものと考えられる（図13）。

なお、明治28年に家相図を描かせた際の日記記述が興味深い。家相図を描かせた根拠やその後の影響が読み取れる史料であるため、ここで取り上げる。

8月16日 根羽村寄留ノ人三州岡崎ノ者ニテ佐々木重三郎ト云フ方相家来訪シ（水野南

北流ト云フ）病氣ニ付郡吾ニ係ル方位ヲ示シ呉シ半信半疑迷フテ種々依頼ス
10月8日 方相家佐々木重三郎ノ見立ニ就部屋ノ雪隠ハ郡吾病氣ニ障リアルハ方角ノ悪敷処ト云フニ付三十日ヲ以取払ヒタリ何モ全癒ヲ祈願スルヨリ事迷フタリト後日ニ氣付ク后年三十年ニ再建ス
11月7日 郡吾八月九日帰宅以来先以座敷ニ寝床トシ又ハ奥部屋又ハ奥座敷トシテ玄関ノ間ニ暫ク床ヲ定メシ処療養ノ新築室出来揚リタルヲ以此日夜ノ二時ニ移ル（之レ時刻モ方相者ノ指示ナリ）

12月8日 郡吾療室門先ニ建アルヲ取払フ

この日記は後に家相見を依頼した信綱本人により懐古的に書き足されているが、次男の郡吾³¹の病のために半信半疑で家相見を依頼したこと、家相見の診断の通りに雪隠を取り壊し、療養室を新築し、時間指定で夜中に部屋を移したこと、雪隠を取り壊したことを後悔し2年後に再建、新築した療養室も12月に取り壊したことが読み取れる。

c. 代田市郎家（竜丘）

・家相に従い、増改築、曳家を繰り返した事例

代田家には多数の家相図が残されており、現存する本棟主屋に関して5枚、前身主屋に関して1枚、その他別家と思われるものが2枚、計8枚ある。1件にこれだけの家相図が残されている例は稀であり、描かれた主な建物全てが現存しているため、主屋や敷地内建物の小刻みな変遷を追い、一家屋の改築の歴史の一例を示したい。

敷地の変遷

代田家の敷地の変遷は、前身主屋が描かれている文久2（1862）年から現在まで計7時点の様子を知ることができる。各建物の変遷に関しては表2にまとめるが、現存する南蔵は2度、長屋も1度曳家をし、配置を変えている（図16）。付属屋に関しての建築年代を示す史料はないが、表より大まかな建築年代も絞り込むことができる。

主屋の変遷

代田家の現存する本棟主屋の建築年代は、慶応2（1866）年と伝えられている。それ以前の文久2年の家相図が1枚残されており、一階平面が6間×7間の前身主屋が描かれている。現状の主屋は一階平面が7間半×7間半であるため、一回り小さな主屋であった。建物形式は不明であるが、正面に1間の底部分があり、全体的に方形平面であるため、前身主屋も切妻造妻入の本棟造であったと思われる。前身建物に関しては、建築年代は明らかでないが、老朽化のために建て替えたのであれば、少なくとも18世紀の建築である。

現存する本棟造主屋に関して見ると、まず勝手部分に関して幾度か「流し」部分の改築が見られる。また現状と比較すると、少なくとも作成年代の明らかな最新の家相図の明治21（1888）年以降に、イロリの消失とともに勝手の板間が土間側へ半間せり出している。

さらに上座敷に注目すると、2度の拡張が行われていることが分かる。現状の上座敷では不自然に上座敷が突出しており、また隣部屋の「しもで」との境が土壁になっており、改築があったことを示しているが、その一連の改築を家相図から知ることができる。まず少なくとも明治11（1878）年までは、その他の一般的な本棟造と同様、上座敷は10畳間で庭側に突出しておらず、整った間取りであったことが分かる。その後、明治21（1888）年までに座敷と「しもで」との境に柱が一本挿入され、土壁で仕切られた。さらに年代は不明であるが、廊下部分を座敷に取り込み、12畳半間として改築されている。追ってこれまた年代不明であるが、一番新しい家相図や現状を見ると、庭側に半間張り出して15畳間に改築された。この一連の改築により前述した森本家と同様に、上座敷が主屋の中で平面的に独立し、さらに「しもで」との隔離が行われ、座敷への動線は庭からと変容した（図17）。

以上、2度の上座敷の増築の理由のひとつは座

敷への動線の変化が挙げられるが、それにしては大掛かりな改築であり、家相による影響があったのではないかと考えられる。

d. 酒井雅人家（上飯田）

・ 8畳間から10畳間中心の主屋へ建て替え

酒井家には松浦琴生による家相図が2枚残されている。1枚は現存する主屋・蚕室・土蔵2棟などを描いた大正13（1924）年のもの（図19）と、もう1枚は建て替え以前の主屋を含め、敷地配置を描いた明治28（1895）年のもの（図18）がある。以上の史料と明治42（1909）年に撮影された古写真（図20）から、特に主屋の建て替えの概要と、その理由に関して考察したい。

敷地の変遷

まず明治28年の家相図を見ると、前身の主屋と、現存する2間四方の文庫蔵が描かれている。吉凶が数多く記され、朱書きで便所、馬屋、コイタメ（肥溜）の改築が指示されている。明治42年の古写真には前身の主屋と、7間半×3間の蚕室が写っている。大正13年の家相図では、建て替えられた現存の主屋（図22）と、蚕室の南側に大正4（1915）年（棟札より）に建築された3間×2間半の穀蔵が新たに描かれている。

その後、昭和59（1994）年に広域農道敷設による区画整理が行われ、酒井家の敷地移動はなかったが、宅地造成による地盤のかさ上げが行われた。それにより、敷地内の主屋、蚕室、土蔵2棟を一度敷地外へ曳家し、地盤をかさ上げた後、敷地内に戻す大工事が行われ（図21）、その際に建物の配置が大きく変化した。主屋は北側に約5メートル移動し、主屋の南側にあった文庫蔵と、同じく西側にあった文庫蔵は北側へ並べて配置され、7間×2間半の蚕室も南側へ移動した（図23）。歴史的建造物の建て替えが容易に行われる近年に、これだけ大規模な曳家を行い、敷地内の建物全てを残した事例は注目に値する。

主屋の変遷

現存する主屋は、入母屋造平入、棧瓦葺で、一階は8間1尺×5間1尺、二階は7間半×4間である。建て替え前の主屋も家相図と古写真により概要を知ることができ、切妻造平入、棧瓦葺で、一階は7間×4間、二階が6間半×4間である。どちらも一階を住居、二階を蚕室とした主屋であり、一階は床上4室と、土間と勝手で構成された、ほぼ同規模で似通った建物である(図24)。

この建て替えの理由については、酒井家では前身主屋は養蚕向きには狭かったからと伝わっている。建て替え前後の主屋を比較すると、間取りや部屋数の変化はないものの、部屋の広さが8畳間と10畳間であることに大きな違いがある。

実際に蚕を飼育する上で、効率よく飼育室の両側に目棚を組み「かごろじ³²」を並べ、中央を通路ないし作業場として用いるためには、飼育室の各部屋の横幅が2間半必要で、飼育室の広さが10畳間、12畳半間、15畳間が適し、8畳間は狭く適さない³³。家相図と古写真により、建て替え時期(現存主屋の建築年代)は明治42年から大正13年の間に絞られるが、明治30~40年代は養蚕業の影響によって二階を蚕室とする主屋や、巨大な蚕室長屋が盛んに建て始められた時代背景である。酒井家でも明治27年から明治42年の間に蚕室を建築しており、さらに養蚕作業の効率や収穫量の増大を求めて主屋の建て替えを行った経緯が見られる。以上、明治後期頃の主屋の建て替えの1例を示し、飼育室の広さが重要であったことを示した。

e. 竹村泰彦家住宅(山本)

- ・養蚕業の影響による二階増築事例
- ・家相図が建築より早い唯一の事例
 - ・家相図 明治44年8月10日
 - ・主屋棟札 明治45年2月18日

敷地の変遷

現状と家相図を比較すると、主屋西側にある3間×2間の穀蔵と付属する味噌蔵、離れは変化が

なく、長屋に付属した2間×2間の道具蔵は味噌蔵北側に曳家され、一連の土蔵群を形成している。

主屋北側にあった5間×2間の長屋は平成18年に取り壊された。その他大きな変容は見られない(図28)。

主屋の変遷

現存する主屋(図26)は、切妻造平入、棧瓦葺で、一階は7間半×4間半、二階は7間×4間であり、二階を蚕室とする主屋であるが、8畳間を基本としているため、養蚕向きとしては狭い(図29)。「明治44年8月10日」の家相図(図25)には、現存する主屋と同規模同平面の建物が描かれているが、主屋屋根裏には「明治45年2月18日」の棟札(図27)が打ち付けてあり、家相図作成年代が建築年代より早い唯一の事例である。この年代だけから考えると、家相図は主屋新築のための設計図の目的で描かれたと捉えられる。

しかし松浦琴生のその他の家相図を見ると、実際に存在する建物を見て家相図を描いており(家相図が建築より後)、水屋や便所といった小建築ならともかく、家相見が存在しない建物をどこまで設計することができたのか疑問である。特に竹村家の家相図を見ると、板敷き部分の板の目や、雨戸の戸袋、イロリ・カマド・コタツなどの設備等、実在する建物を見て描いたと思われる表現であり、設計図とは考えられない。そこでこの矛盾を論理的に説明する上で、次の2点を着目できる。

まず松浦一派の家相図には、二階が存在する建物には必ず階段の表記があるが、この家相図には表現されておらず、よって描かれた建物は平屋建てであることを示している。

また家相図には但し書きとして、
 本宅建替普請、都(すべ)て付属建物、至皆普請、
 本年九月廿日より十一月廿日迄之内、最吉也
 本年西仮宅して四十五日住居し、本宅へ未申西
 戌亥丑寅の日時を以て移(わた)まし吉也
 万事二右日時二手始被成最よろし
 来四十五年中八坤艮乾巽大吉

右吉方万事宜し 手続き何方よろし 日時右同断

との記載があり、要するに本年中の建て替えは吉としている。

この2点を考慮すると、現存する二階建ての主屋は、屋根形式は断定できないが、当初は平屋建てであったと考えられる。前述の通り明治後期は養蚕業の導入により建物が影響を大きく受けた時代であり、そこで養蚕向きに新增改築が必要になり家相図を描かせたが、「主屋建て替え、付属建物、皆に至る普請は吉」とあり、二階増築の吉凶は記されていないので、最初から二階を増築することを前提にした相談ではなく、漠然とした新增改築の相談であったに違いない。

ここで養蚕向きの新增改築を行うにあたって、二階に蚕室を増築する以外にも、例えば平屋の主屋を取り壊して10畳間を基本とした一回り大きな平面の二階建て主屋を新築することや、さらには別棟で蚕室長屋を新築するといった選択肢もあったはずである。そうした中で既存の主屋に二階を増築したということは様々な理由が考えられるが、ひとつは家相図を見ると、イロリ、カマド、コタツ、外便所、土蔵、長屋、小屋等、全てに至るまで「最大吉、吉、無障、よろし」の記載のみで、その他の家相図と比較すると「大凶・凶・よろし」の診断は一切なく、現状の平面状の状態を崩したくなかったのかもしれない。

また、既存の主屋がそれほど建築年代を経ておらず、取り壊すには忍びなかったとも推測でき、先行する平屋建ての主屋の建築年代を示す史料はないが、そう考えると遅くとも江戸末期から明治初期の建築と考えられる。

以上、明治45年に平屋建ての主屋に二階を増築した経緯を論じ、新增改築に際して、家相図による診断を仰いだ事例を示した。

5. おわりに

飯田・下伊那地域は特に明治期から大正期にかけて地元在住の松浦琴生という家相見が活躍したフィールドであり、まだまだ多数の家相図が潜在していると思われる。

この松浦琴生に関しての人物像は明らかでなく、松浦琴生が居住した勝家の聞取調査でも家系の中で把握されておらず、今のところ松浦琴生に関する文字史料も発見できていない³⁴。また、たかだか100年程前のことであるのに、近隣地域で松浦琴生の生涯に関する口頭伝承が確認できない。今後、松浦琴生の日記や帳簿のような史料や、本稿の北原家の事例のように家相見を依頼した側の日記等が発見できれば、家相や家相見に関してのさらなる知見が深まると期待される。

実際、一地域からこれだけの家相図が発見されると、家相がどれだけ当時の一般家屋建築に影響を与えたのか気になるところである。本稿では増改築が顕著な5事例を取り上げたが、本稿で取り上げなかったその他の事例も含めて印象を述べると、建築後の任意の時期に、風呂・便所や水回りの増改築に際して家相見の判断を仰ぐことが一般的に行われていたと想像される。また上記北原家の事例のように、身内の不幸や何らかの節目の際に家相を診断したと思われる。家相に対する信頼度は、北原家の事例で病床に伏した際に医師ではなく家相見を呼んでいることからしても、家相が当時の農家の生活において重要な位置にあったと言わざるを得ない。

ここで、建築後より建築前に家相診断する方が効率的と普通は考えるものである。しかし家相見は建築家（大工）ではないので、小建築や簡易増築ならともかく、主屋のような建物において平面上の指示はできたとしても、建物の構造までは設計できないであろう。また当時の大工は現在のように細かな設計図を描くわけではないので、事前に設計図を見て家相判断するということもできな

かったと思われる。それゆえ、建てた後の実物を見ての家相判断が一般的であったと考えられる。

以上本稿では、現存する建物と家相図を比較検討し、家相の需要や建築に対する影響、建築学における史料価値等を考察した。

最後に、筆者の地道な調査に目を止めていただきシンポジウムにお招きいただいた宮内先生に感謝いたします。また家相学に関してご教示いただいた大学の後輩でもある川后さんにも感謝します。

※本稿は「家相図と建築」『松尾大森本の家と周辺の社会』飯田市歴史研究所、2009.3、P13-16、ならびに「家相図と建築」『飯田市歴史研究所年報』7号、2009.8、P156-169、『飯田・下伊那史料叢書 建造物編1 本棟造と養蚕建築』飯田市歴史研究所、2011.3、P101-129の内容を加筆修正したものである。

また2009年度財団法人第一住宅建設協会奨励研究の研究助成における研究成果の一部である。

表1 飯田・下伊那地域における家相図リスト (2010年12月現在)

所有		作者	作成年代	主屋	主屋種別	大きさ (横×縦)
森本信正家1	松尾	—	文化文政	現存	本棟造主屋	157×128cm
森本信正家2	松尾	—	文化文政	現存	本棟造主屋	122×99cm
森本信正家3	松尾	鈴木商来	—	別宅	本棟造主屋?	
代田市郎家1	竜丘	松浦琴生	明治44.9.5	別宅	不明	53×81cm
代田市郎家2	竜丘	松浦琴生	明治45.5.31	別宅	不明	26×47cm
代田市郎家3	竜丘	松浦琴榮	文久2.12	前身建物	本棟造主屋?	82×80cm
代田市郎家4	竜丘	—	—	現存	本棟造主屋	64×64cm
代田市郎家5	竜丘	松浦琴生	明治11.3.5	現存	本棟造主屋	66×96cm
代田市郎家6	竜丘	松浦琴生	明治21.7.30	現存	本棟造主屋	70×130cm
代田市郎家7	竜丘	三枝精香	—	現存	本棟造主屋	78×130cm
代田市郎家8	竜丘	—	—	現存	本棟造主屋	78×108cm
酒井雅人家1	上飯田	松浦琴生	明治28.7.7	前身建物	養蚕主屋	50×59cm
酒井雅人家2	上飯田	松浦琴生	大正13.10.17	現存	養蚕主屋	52×104cm
原嘉彦家1	豊丘村	松浦弥太郎	天保7.9	現存	本棟造主屋	114×104cm
原嘉彦家2	豊丘村	—	—	現存	本棟造主屋	104×162cm+20×52cm
原嘉彦家3	豊丘村	松浦琴生	明治32.4.28	現存	本棟造主屋	48×99cm
松村定利家1	三穂	松浦琴生	明治12.1.15	前身建物	不明	96×64cm
松村定利家2	三穂	—	明治38.1.27	現存	養蚕主屋	82×77cm
松村定利家3	三穂	松浦琴生	明治42.4.25	現存	養蚕主屋	82×52cm
松村定利家4	三穂	—	大正15.1.1	別宅	養蚕主屋	40×30cm
長谷部宗宏家1	川路	吉川撰洲	明治21.1	現存	養蚕主屋	81×57cm
長谷部宗宏家2	川路	松浦琴生	明治22.5.17	現存	養蚕主屋	66×120cm
坂井喜夫家1	山本	—	嘉永4	取壊	本棟造主屋?	71×62cm
坂井喜夫家2	山本	—	天保13	別宅	本棟造主屋	58×67cm
部奈一朗家1	松川村	松浦琴生	明治8.4.6	取壊	本棟造主屋	156×116cm
部奈一朗家2	松川村	松浦琴生	明治39.2.23	取壊	本棟造主屋	79×109cm
篠田重美家1	上郷	松浦琴生	明治8.5.31	現存 (移築前)	本棟造主屋	72×77cm
篠田重美家2	上郷	三枝精香	大正13.9.3	現存 (移築後)	本棟造主屋	55×80cm
今村善興家1	座光寺	—	明治38.11	取壊	本棟造主屋	71×114cm
今村善興家2	座光寺	松浦琴生	明治41.8.16	取壊	本棟造主屋	
田中正彦家	上飯田	—	明治35.11	現存	本棟造主屋	57×87cm
北原斌夫家	座光寺	佐々木重三郎	明治28.8	現存	本棟造主屋	77×77cm
武田久家	豊丘村	竹村南北	明治28.8	現存	本棟造主屋	78×110cm
今村公人家	川路	伊東正義	明治44.5	取壊	商家	76×60cm
宮川清助家	下久堅	伊藤正義	—	取壊	本棟造主屋	
木下昭郎家	松尾	松浦琴勝	大正7.12.22	現存	本棟造主屋	84×115cm
矢澤通則家	座光寺	松浦琴勝	大正15.3.6	現存	養蚕主屋	83×53cm
三石信義家	下久堅	松浦琴生	明治10	現存	本棟造主屋	108×108cm
鎮西徹家	下条村	松浦琴生	明治28.1.16	現存	本棟造主屋	
松澤卓治家	上飯田	松浦琴生	明治28.4.11	現存	養蚕主屋	88×63cm
吉川布希子家	松尾	松浦琴生	明治32.2.12	現存	町家	48×66cm
矢澤秀信家	伊賀良	松浦琴生	明治32.9.18	取壊	本棟造主屋	82×52cm
矢澤洋孝家	伊賀良	松浦琴生	明治33.4.19	現存	本棟造主屋	78×93cm
玉置勝郎家	三穂	松浦琴生	明治33.5.22	現存	本棟造主屋	58×80cm
木下博史家	龍江	松浦琴生	明治42.1.6	取壊	養蚕主屋	84×40cm
矢澤国義家	伊賀良	松浦琴生	明治43.11.9	現存	養蚕主屋	52×83cm
竹村泰彦家	山本	松浦琴生	明治44.8.10	現存	養蚕主屋	81×52cm
西澤真太郎家	松尾	松浦琴生	大正3.12.7	現存	町家	39×110cm
中島捷家	竜丘	松浦琴生	大正5.11.7	取壊	養蚕主屋	109×48cm
福澤博家	豊丘村	松浦琴明	明治43.11.26	取壊	養蚕主屋	51×69cm
美濃部宏家	阿智村	畠多門橘正固	明治43.6.7	取壊	個人製糸工場	
牧野忠夫家	鼎	—	—	現存	養蚕主屋	
関島伸喜家	鼎	—	—	現存	本棟造主屋	60×70cm

< 森本家図版 >

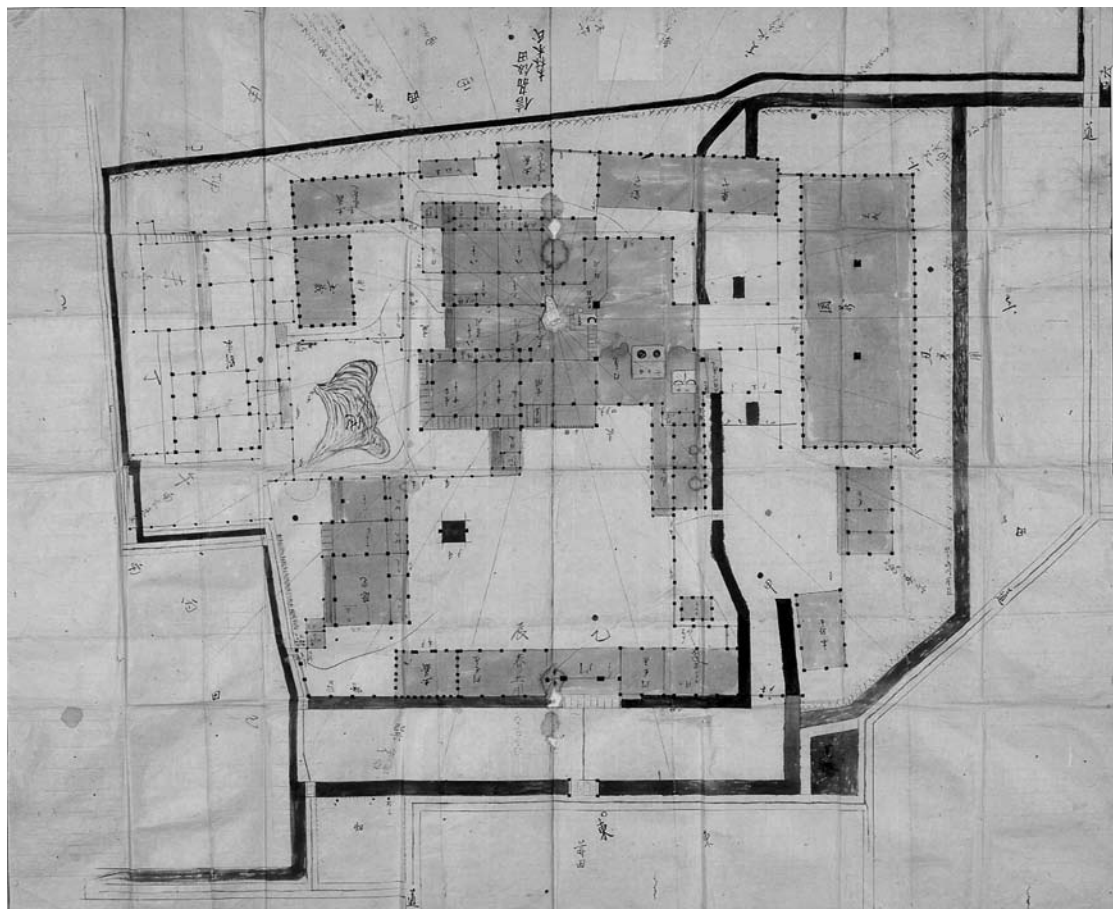


図4 森本家家相図（文化文政時代）「文化文政時代居宅囲通繪図」
157×128cm



図5 森本家主屋外観



図6 森本家古写真（昭和21年11月11日）
主屋右奥に寄棟造の蚕室・手前に長屋門

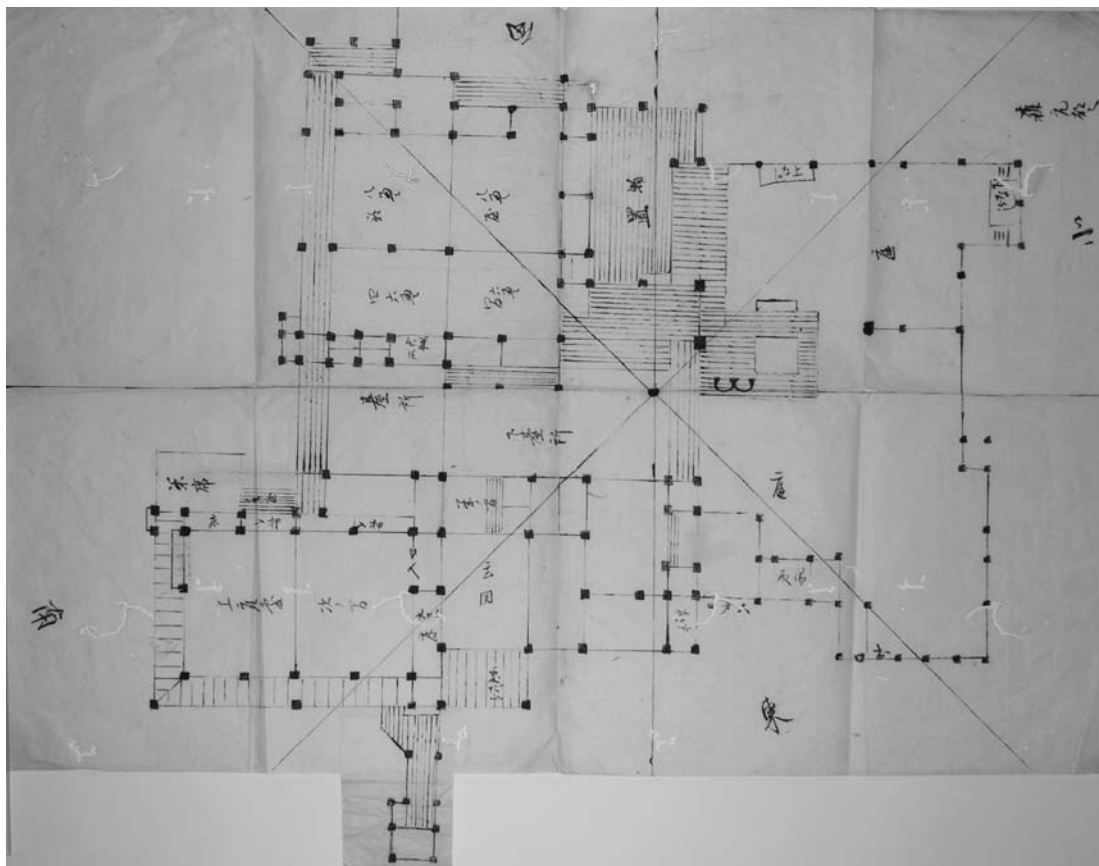


図7 森本家主屋指図(年代不詳)
58×39cm

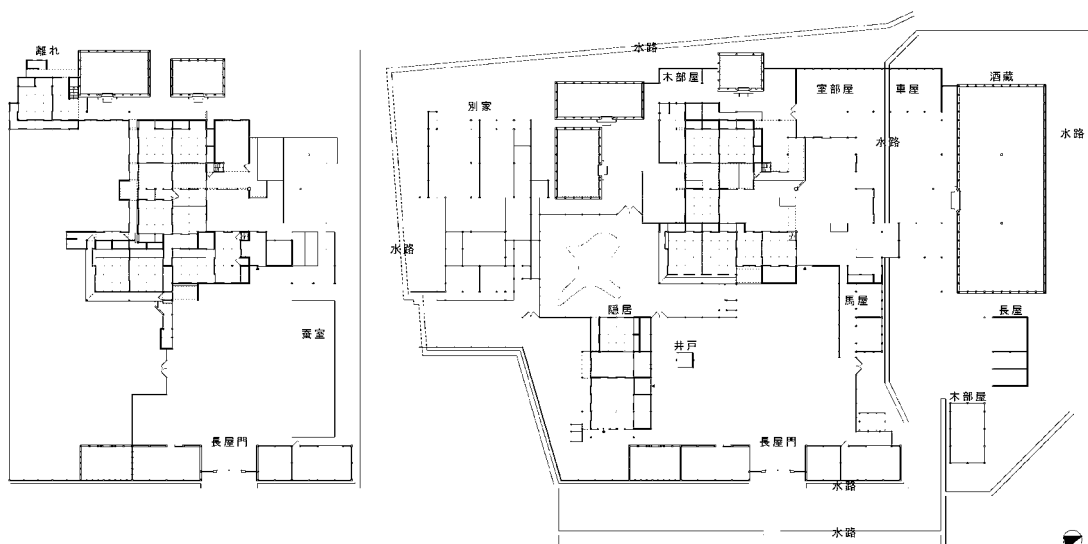


図8 森本家敷地の変遷
左：現状 右：文化文政時代(家相図より)

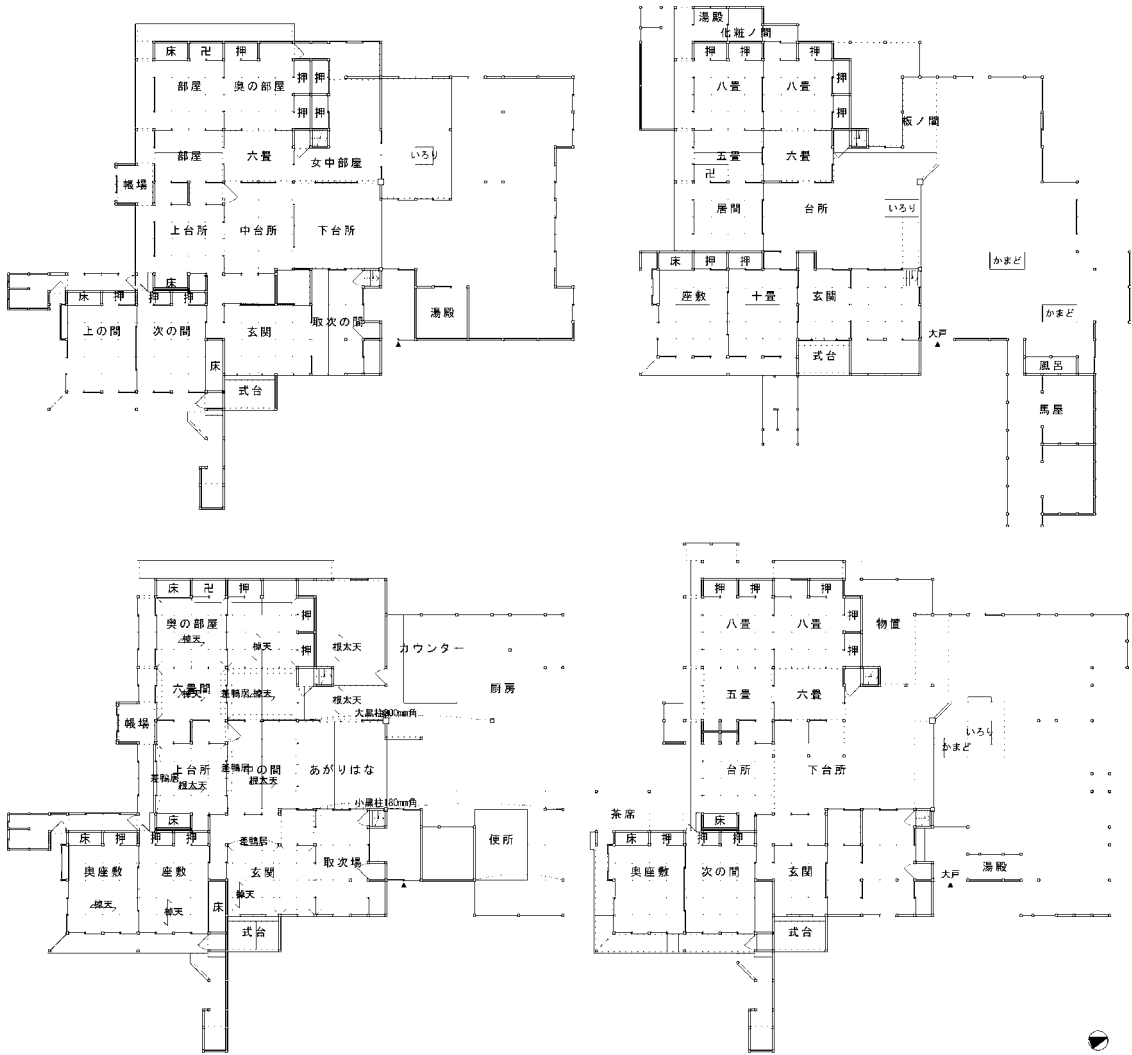


図9 森本家主屋の変遷

左上：昭和46年（緊急民家調査より）

右上：文化文政時代（家相図より）

左下：現状

右下：江戸後期～明治期（指図より）

<北原家図版>

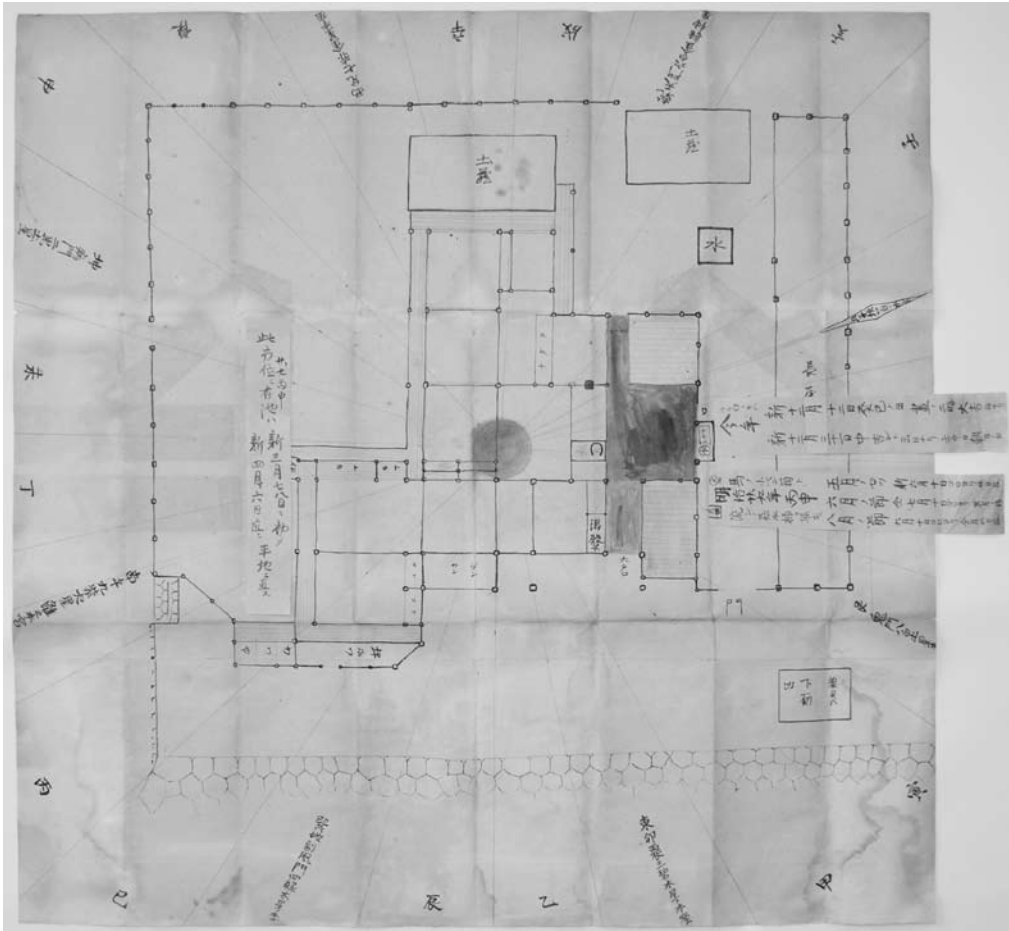


図10 北原家家相図 (明治28.8)
佐々木重三郎 77×77cm



図11 北原家主屋外観



図12 北原家主屋内部 (ひろま吹抜)

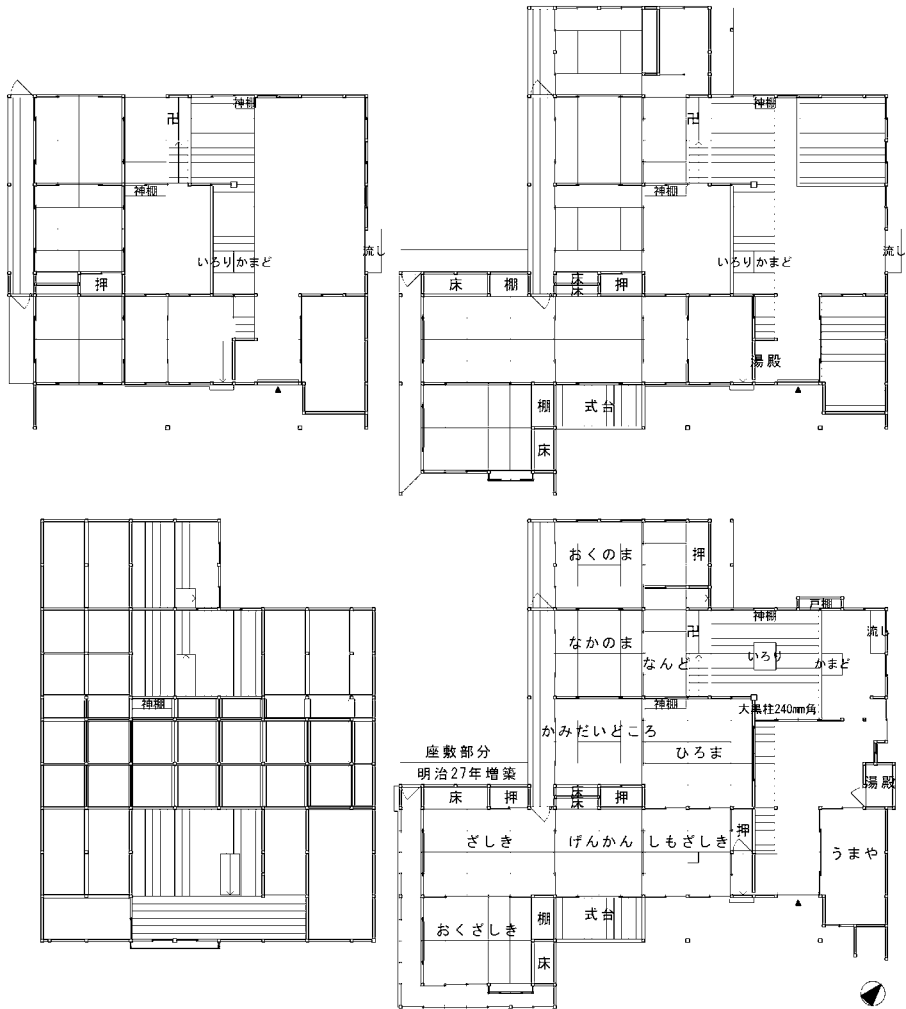


図13 北原家主屋の変遷

左上：建築当初推定復元図 右上：明治28年家相図より
 左下：現状二階平面図 右下：昭和46年民家緊急調査より

<代田家図版>



図14 代田家主屋外観



図15 代田家主屋内部（拡張された座敷）

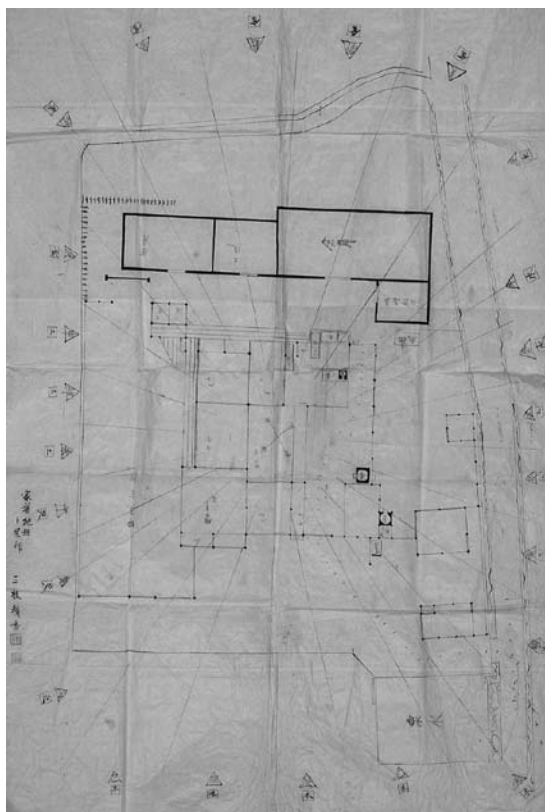
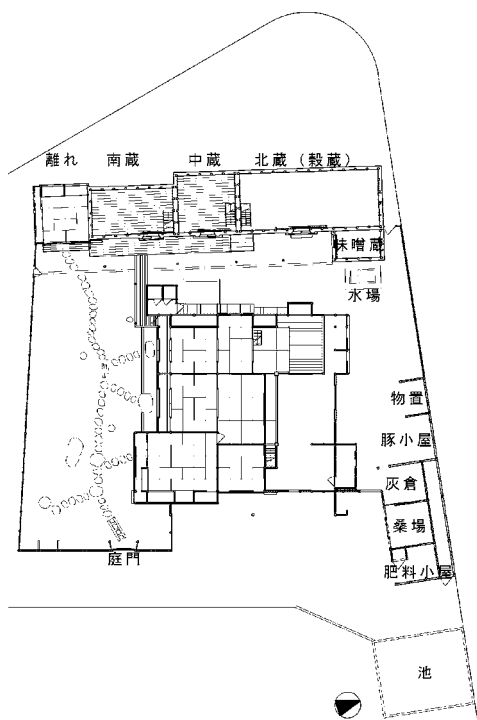
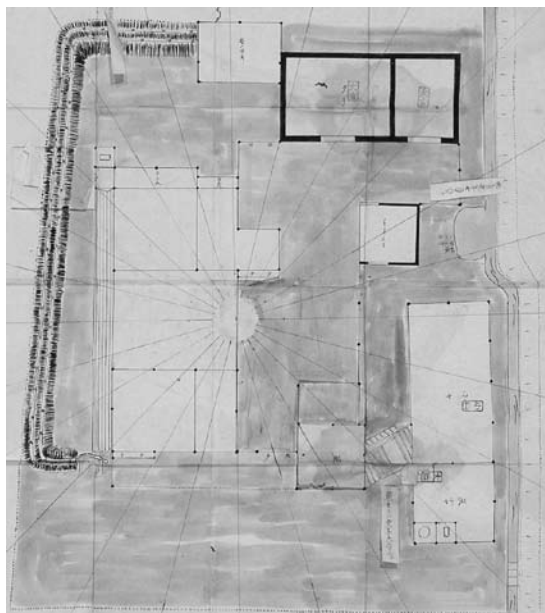
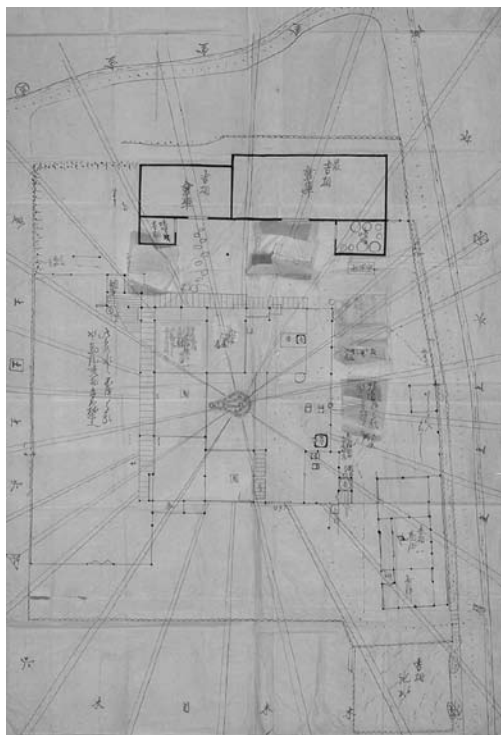


図16 代田家敷地の変遷

左上：家相図（明治21.7.30）松浦琴生 70×130cm 右上：家相図（文久2.12）松浦琴楽 82×80cm

左下：現状配置図

右下：家相図（年代不明）三枝精香 78×130cm

表2 家相図からみる代田家の建物の変遷

	文久2年 (家相図)	- (家相図)	明治11年 (家相図)	明治21年 (家相図)	- (家相図)	- (家相図)	現状
主屋 (前身)	○	取壊	→○	→○	→○	→○	→○
主屋 (現存)	取壊	取壊	流し増築	虎しみ窓・田舎窓	座敷拡張	座敷拡張	障子紙・いろし取
土蔵 (前身)	○	→○	→○	取壊	→○	→○	→○
味噌蔵 (前身)	○	→○	→○	取壊	→○	→○	→○
北蔵				建築	→○	→○	→○
中蔵						建築	→○
南蔵	建築	東に曳家	→○	→○	→○	→○	→○
味噌蔵				建築	→○	→○	→○
離れ							建築
長屋	○	西側1間取壊	東に曳家	間取り変更	→○	→○	→○

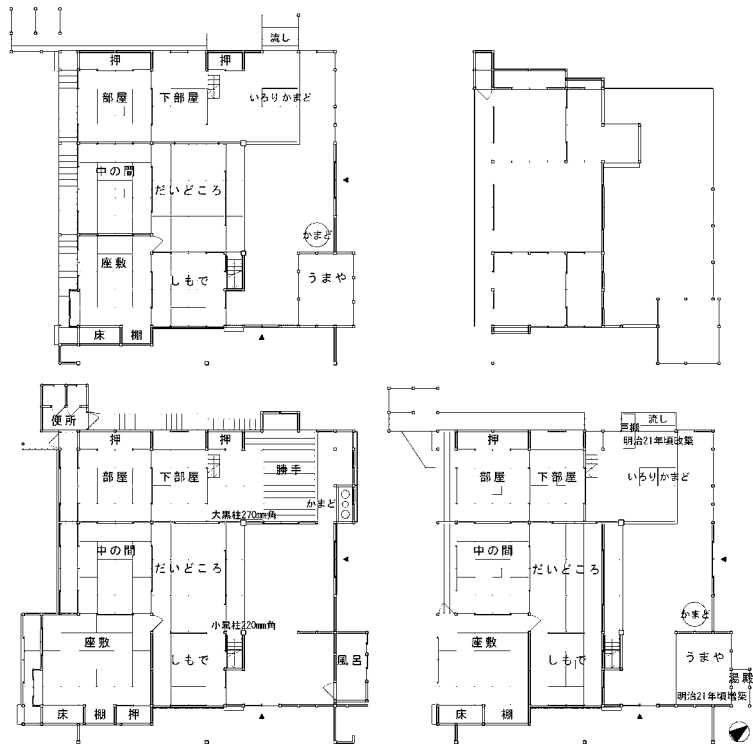


図17 代田家主屋の変遷

左上：明治11年家相図より 右上：文久2年家相図より（前身主屋）
 左下：現状一階平面図 右下：明治21年家相図より

<酒井家図版>

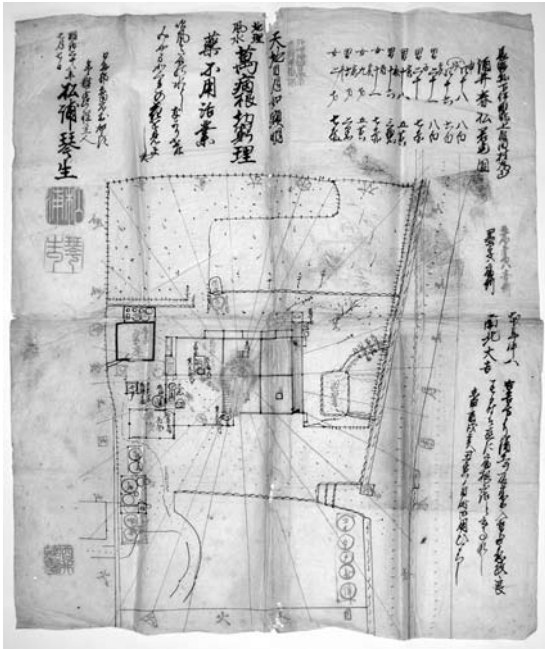


図18 酒井家家相図 (明治28.7.7)
松浦琴生 59×50cm

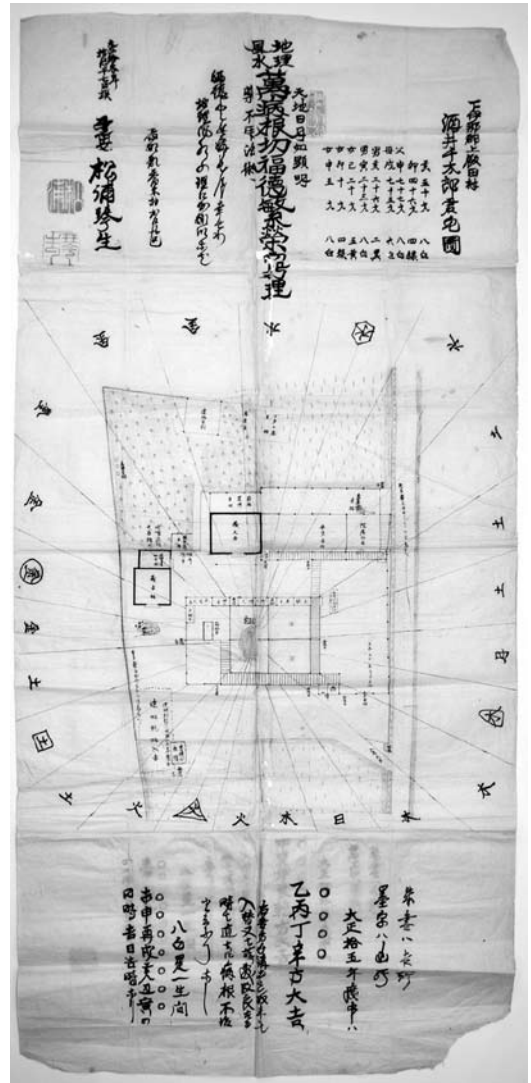


図19 酒井家家相図 (大正13.10.17)
松浦琴生 52×104cm



図20 建替前の主屋と改築前の蚕室 (明治42年)



図22 建て替え後の主屋 (曳家・改築前)

表3 家相図・古写真からみる酒井家建物の変遷

	明治28年 (家相図)	明治42年 (古写真)	大正13年 (家相図)	昭和30年	現状
主屋(前身) 7.4×5・6.5×4	○ → ○	○	取壊		
主屋(現存) 8.1×5.1・7.5×4			建築	○ → ○	○ → ○
蚕室 7.5×3・7×2.5		○	○ → ○	○ → ○	○ → ○
文庫蔵 3×2.5・3×2.5	○ → ○	(○) → ○	○ → ○	○ → ○	○ → ○
穀蔵 2×2・2×2			○ → ○	○ → ○	○ → ○
			大正4年建築(標札)	曳家	北へ曳家

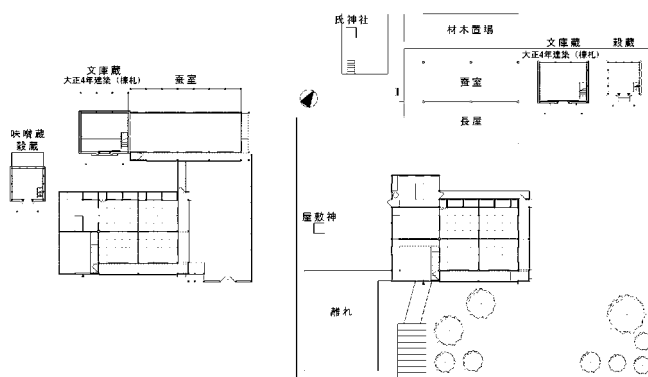


図23 酒井家敷地の変遷

右：現状配置図

左：主屋建て替え前の配置図（大正13年家相図より）

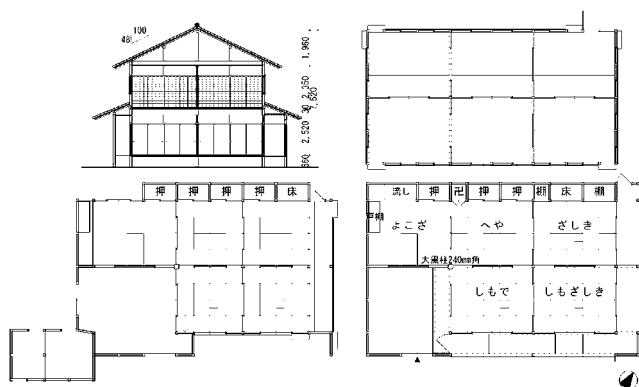


図24 酒井家主屋の変遷

左：建て替え前の主屋平面図（明治28年家相図より）

右：建て替え後の主屋平面図（大正13年家相図・現状より）

現状は、一階西側に半間の下屋が設けられ、二階が居室化されている

<竹村家図版>

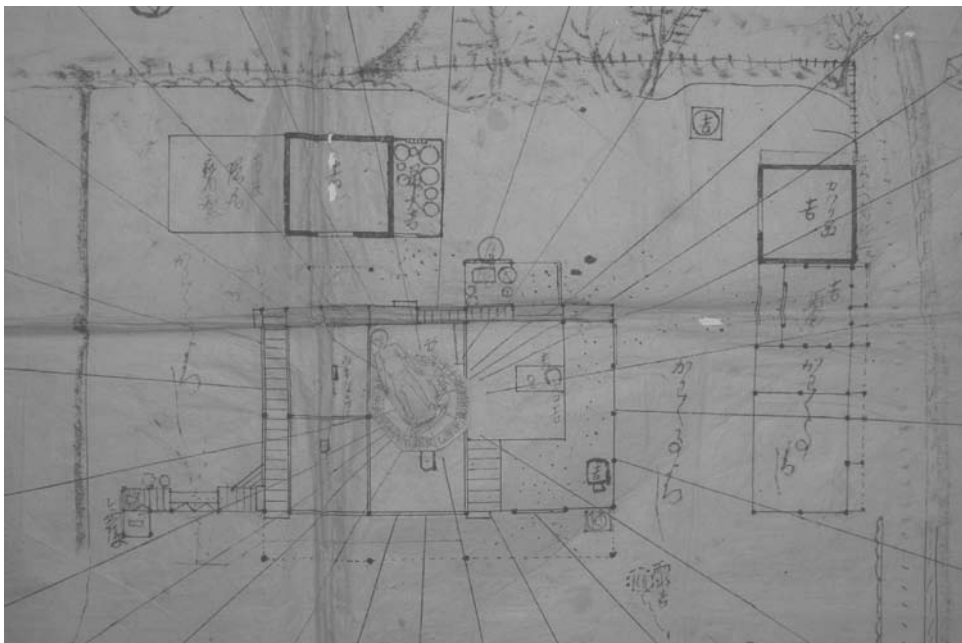


図25 竹村家家相図（明治44.8.10）
松浦琴生 81×52cm



図26 竹村家主屋外観



図27 竹村家主屋棟札 明治45年2月18日

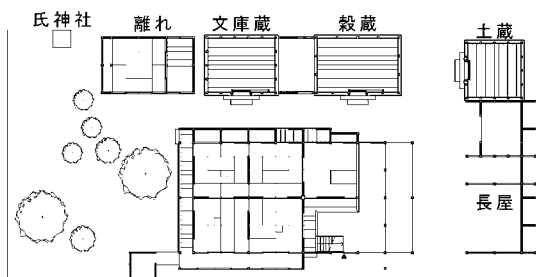


図28 竹村家配置図

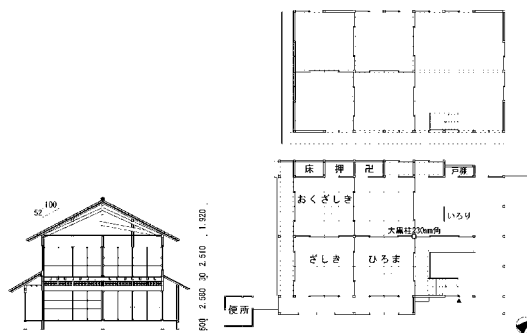


図29 竹村家主屋平断面図

注

1. 参考文献1、P27、参考文献5、P112。
2. 昭和20年代以降、農林省より「生活改善運動」が推進され、その一端として「農家の台所改善」が盛り込まれ、改築に対する助成金も交付されたことから、昭和30年代にほとんどの家で勝手が改築され、イロリ・カマダが姿を消した。
3. 「本棟造」とは、長野県中南部に分布する切妻造妻入、石置板屋根の大型の民家形式である。17世紀後期から19世紀後期に建築され、当初は上階層の民家形式であったが、江戸後期には有力百姓層に普及し量産された。飯田市域に約200棟残存している。
4. 当地域の養蚕業は、少なくとも統計史料の残る明治後期以降で1戸当たりの収繭量は長野県が全国1位、そのうち飯田・下伊那地域は長野県内一である。そのため明治中期～昭和初期に建築された、一階を住居・二階を蚕室とする総二階主屋や、別棟の専用蚕室が数多く残存する。
5. 参考文献1・2より、宮内貴久氏が研究対象として整理収集された家相図は274枚である。また川後のぞみ「家相図の書込内容に見られる年代変化」『民俗建築』第132号、日本民俗建築学会、2007.11、P45-52では270枚を研究対象としている。ただしこれらの家相図は民家調査報告書等に掲載されているものがほとんどであり、日本中くまなく収集すれば膨大な数の家相図が存在すると思われる。
6. 参考文献1・2等。
7. 参考文献3、「家相文献を中心とする江戸時代の家相説の展開の研究」1997.3等。
8. 川後のぞみ「居住空間に対する民俗の心性」2009年度広島大学学位論文、第4章 家相図から見る家相判断者の活動～長野県下伊那地域を事例として～。
9. 明和～安永頃生まれ。天明期(1781～88年)に『家相観地録』を著す。摂州高槻藩藩士。
10. 寛政10(1798)年に『家相解図』、文化5(1808)年に『匠家故実録』を著す。大坂高津に在住。
11. 安永3(1774)年生まれ。天保2(1831)年に『方鑑図解』を著す。松浦東鶏の甥。
12. 参考文献4、P53。
13. 松浦琴生は元治元(1864)年に松浦派の門人となった。その後、松浦琴生が居住していたのは飯田市に隣接する喬木村加々須の勝家であるが、勝家との関係や、その他の松浦一派との関係は明確でない。加々須の勝家の墓の一角に松浦琴生夫婦の墓が残り、俗名は勝信義とある(図2)。
14. 松浦琴生『萬病根切窮理』生々館、1889.4。

15. 『飯田下伊那地域史料現状記録調査報告書1 飯田市 松尾新井 森本家(大森本) 文書』飯田市歴史研究所、2008.3。以下史料名称・史料番号はこれに従う。
16. 史料12-6。
17. 史料12-8。
18. 「永代萬覚日記」(史料13-14-2)、文政2(1819)年森本甚三郎信将作成より。
19. 「門普請諸色入用仕揚記録帳添大雄寺借用証書式通(長屋門建立につき)」(史料55-45)より。
20. 「三型土蔵普請帳」(史料27-36)より。
21. 「座敷平面図」(史料20-6)、「永記録覚帳」(史料55-29)より。
22. 「隠宅普請諸事記」(史料27-8)より。
23. 棟札より。
24. 「建築物保存修理変遷誌」(資料19-8)より。
25. 文政8(1825)年～明治14(1881)年。嘉永2(1849)年より庄屋役。平田篤胤没後の門人。元治元(1864)年水戸浪士の伊那街道通過に尽力した。
26. 15代稲雄の末男。上郷下黒田損の北原清次郎家(屋号張原)に養子として入り、衆議院議員、下伊那郡会議員、長野県会議員、組合製糸天竜社社長も務めた。また北原痴山の名で書を多く残している。
27. 水野南北派。水野南北(1757～1834)は大坂の易学者で門人も多くいた。参考文献1、P65。
28. 「享保元年 春中北之屋敷江八右衛門弟嘉平太別家而間七間裏引七間二立」『北原年代記 一』より。
29. 嘉永4(1851)年～大正7(1918)年。庄屋役、衆議院議員、所得税調査委員等を務めた。
30. 『当家年代記』に建築の記述は見つからず。明治28年の家相図には増築した上座敷が描かれている。
31. 16代信綱の次男。11月9日に享年23歳の若さで亡くなる。
32. 当地域では、養蚕用の棚を「目棚(メダナ)」、出し入れする蚕座を「カゴロジ」と呼ぶ。
33. 図30のように目棚・カゴロジを配し給桑動作を行う。飼育室の広さの考察は拙稿「飯田・下伊那の養蚕建築―座光寺地区を主例とした建築類型―」日本建築学会計画系論文集、第74巻、第646号、

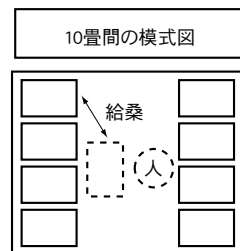


図30 給桑の動作とカゴロジの配置模式図

P2657-2662参照。

34. 勝家の古文書史料の一部は地元の喬木村歴史民俗資料館に預けられており、その他約1350点は国文学研究資料館に「信濃国伊那郡加々須村勝家文書」として寄贈されている。いずれも庄屋関係の史料がほとんどで、松浦琴生に関する史料はない。

参考文献

- 1) 宮内貴久『風水と家相の歴史』歴史文化ライブラリ-270、吉川弘文館2009.5。
- 2) 宮内貴久『家相の民俗学』、吉川弘文館2006.4。
- 3) 村田あが『江戸時代の家相説』雄山閣、1999.2。
- 4) 大河直躬『住まいの人類学』平凡社、1986.9
- 5) 『図説 民俗建築大事典』日本民俗建築学会編、2001.11。
- 6) 『写真でみる民家大辞典』日本民俗建築学会編、2005.4。
- 7) 『長野県史 美術建築資料編 全一卷(二) 建築』長野県史刊行会、1990.3
- 8) 『長野県史 近世史料編 別巻統計(二)』長野県史刊行会、1985.3